

最後まで合格を諦めさせないための……

# 受験本番を乗りきる 5ステップ

受験が間近になると、学習面はもちろん、進路指導の面でも担任の役割は一層大きくなる。特に出願に向けて、担任の指導力が生徒の受験校決定に大きな影響を及ぼすことがある。

具体的に、冬休み以降、学習面や進路面で求められる指導、センター試験の結果を受けての最終面談や出願指導のポイント、また私立大受験、後期日程試験に向けた指導の要点など、時期を追って九つのステップに分けて考えてみる。生徒が最後まで頑張って受験本番を乗り越え、希望をできるだけかなえられる指導とはどのようなものだろうか。

## 1 step 冬休みに向けた指導

冬休みはセンター試験対策にシフトする時期。中でも苦手な科目や分野に特に力を入れたい。教材の中心は過去問題集だが、それ以外にもこれまでのマーク模試、センター試験直前問題集などがある。焦りから新しい問題集や難しい問題に手を出す生徒もいるが、センター試験に出る問題は教科書を理解していれば十分対応できる。今までやった所を一通りチェックし、定着させるのが一番である。

同じ問題演習を繰り返すことで、その分野・問題へのアプローチの仕方、知識の使い方、まとめ方、応用の仕方などを着実に身に付けることができる。同じ問題を解く場合は、以前より3分5分と速く解けるようにする。時間勝負の本番で、その訓練が生きてくる。本番に向け、センター試験の実際の時間割通りに、各科目の問題を解いてみるのもよい。本番同様2日間かけて1日目は10時から英語、12時50分から

地歴というように、本番の時間により合わせて取り組むようにする。

私立大を受験する生徒に対しては、12月中旬辺りから出願が始まるので、出願時期を確認するよう言うっておきたい。特に、センター試験を利用する私立大の出願時期は、センター試験の前と後に分かれるので注意が必要だろう。センター試験会場の下見も欠かせない。本番と同じ土日にすれば、交通機関や所要時間も正確に確認できる。

冬休みはセンター試験対策にシフト  
同じ分野・問題を繰り返す学習法を  
本番の時間に合わせて解いてみる

## 2 step 冬休み明けから センター試験前日までの指導

冬休みが終わると、センター試験までは約1週間。しかし、生徒が登校する日数となると実質は1週間もない。授業がある場合も、ほとんど問題演習中心になるはずだ。

この時期の学習法は、冬休みのやり方を続けるのが基本となる。冬休みもそうだが、この時期、地歴公民や理科の勉強はかりして学習が偏る生徒がいる。しかし、国・数・英は継続した学習が必要な教科であり、多くの大学でセンター試験での配点が高いので、毎日相応の学習時間は確保させるようにしたい。

授業でセンター試験の演習をやる場合も、単にただならぬと取り組ませては効果が上がりにくい。生徒に本番を意識させながら、時間を計って時間内で解答させる実践演習のつもりで取り組ませたい。

その場合、問題を解くときは、第一問から順番に解いていくのではなく、時間配分を考えて、答えやすそうな問題から取り掛かる習慣を身に付けさせるのもよい。順番通りに解くと、途中

の問題で引っ掛かって予想以上に時間を取られ、最後の問題まで行き着かない危険性があるからだ。まず問題全体を見渡して、解く順番を判断する癖を付けさせるとよい。このやり方は、生徒が自宅で問題を解くときにも心掛けさせたい。

本番2、3日前には、それまでのノート、暗記カードなどを総点検させるとよいだろう。ノートやカードを目の前に積み、自分はこれだけやってきたんだという自信と安心感を持つことにもなる。

センター試験後もそうだが、3学期になると学校に出ず、家で学習する生徒も見受けられる。しかし、学校で勉強をすれば気分転換にもなるし、その場ですぐ教師に質問できる利点もある。特に精神的に追い込まれている生徒も含めて、できるだけ学校に出てくるよう指導したい。

国数英は継続した学習を  
答えやすそうな問題から解く習慣を  
本番直前はノート、カードを総点検

## 3 step 冬休みから試験日までの 生活面での注意

冬休みに入ると生活リズムが崩れがちになる。夜早めに寝て十分に睡眠を取り、朝きちんと起きて、試験の行われる昼間に勉強する「昼型」を実行するよう、冬休み前に強く言うっておきたい。中には焦りから極端に無理をして夜遅くまで勉強し、昼間は集中力が落ちる生徒もいるので注意が必要だ。最後の試験が終わるまで言えることだが、本番の試験を意識して、その時間帯に学習サイクルを合わせるようアドバイスしておく。また、睡眠不足や風邪には十分気を付けるように言うしておく。

冬休みに入ると生活リズムが崩れがちになる。夜早めに寝て十分に睡眠を取り、朝きちんと起きて、試験の行われる昼間に勉強する「昼型」を実行するよう、冬休み前に強く言うっておきたい。中には焦りから極端に無理をして夜遅くまで勉強し、昼間は集中力が落ちる生徒もいるので注意が必要だ。最後の試験が終わるまで言えることだが、本番の試験を意識して、その時間帯に学習サイクルを合わせるようアドバイスしておく。また、睡眠不足や風邪には十分気を付けるように言うしておく。

生徒の心構えとしては、完璧主義に陥って自分を追い詰めないことが大切だ。「入試対策に完全はない。皆どこかに穴はある。だが、それでも試験には受かる」と、ここまで来たらよい意味での開き直りの気持ちを持たせたい。万が一風邪をひいた場合は、無理をするよりは、「2日くらい休んでも勉強は遅れない」と、思い切って休むくらいが、結局はよい結果につながる。「失敗したら……」「不合格になったら……」と不安になって、夜も眠れないというような生徒には、特に注意が必要だ。自分が学習してきたものを振り返らせて、自信を持たせるのも一つの方法だろう。

保護者には、子どもに対して自然な態度で接するよう願っておく。子どもは、たとえ本人が自覚していてもかなりビビリビビリした状態にある。その上、親も緊張して、腫れ物に触るようになると接したら、その空気はすぐに子どもに伝わる。親が自然な態度でいれば、子どもも気分が休まる。

また、保護者には「寝め上手、励まし上手」であるように心掛けてもらう。頑張っている部分に目を向け、子どもが前向きに受験に臨めるようにしてやりたい。反対に「大以外はだめ」とブレッシャーをかけたたり、休憩している子どもに「余裕あるわね」と皮肉を言うなど、心ない言葉は慎むようお願いしておくことも大切だろう。

勉強時間は本番に合わせて「昼型」  
完璧主義にならず、開き直りも大切  
親は子どもに自然な態度で接する

## センター試験当日の心構え

step

生徒は、センター試験で科目別の目標点を設定しているはずだ。とは言え試験中に目標点を意識しすぎると、かえって失敗する危険性がある。例えば英語で140点の目標点を持つていた生徒が、予想で100点くらいしか取れなかったとする。実は、その年の英語は難しく、全体の平均点が90点だったとしたら、その生徒は本当は善戦していることになる。難しい問題は他の生徒もできていないことが少なくないのに、本人は目標点より低いことにショックを受けて、第1日目から焦ってしまつた。「英語の失敗を他の科目で取り返さなければ……」と、自分にプレッシャーをかけて、かえって後の科目で力が発揮できなくなることがある。

「いざ本番が始まつたら目標点を意識しすぎず、受験する科目に集中することが大切だ。そのことを事前によく言い聞かせておくよ。失敗したと思つてもよくよせよ、気持ちを切り換えて次の科目に臨むよう指導し

ておきたい。当然、自己採点は2日間の試験終了後にさせるべきだろう。当日は、空き時間を作らず、理科と理科の両方を受けたり、2日目最後の公民にも挑戦するよう指導して欲しい。公民は十分に受験勉強していても、普段の授業をきちんと受けていけば比較的点数の取りやすい科目なので、予想外の点数を取れることがある。4教科の受験勉強しかしていても、空き時間を使って公民や理科を受けておけば5教科受験になる。出願校の可能性を広げるためにも、できるだけ数多く受験しておくに越したことはない。

センター試験の翌日は、まず自己採点から始める。出願の判断材料を正しく得るためにも、採点ミスに注意し、誤差を最小限にとめるようにさせる。自己採点の後に合格可能性判定のために記入する志望校は、2学期後半に決めておいた第1併願パターン、第2併願パターンの大学名を書くよう強く言つておく。自己採点の結果が良かったからと難問大ばかりを並べてみる生徒、またその逆の生徒も少なくない。しかし、それではその後の国公立大の出願指導の指針が出ないし、それまでの進路指導の流れから外れた受験校決定になってしまう。生徒が書いた大学名を担任がチェックする時間的余裕はほとんどないので、事前にその点を生徒に伝えておく必要があるだろう。

合格可能性判定が返ってくるまでの間、生徒の中には気が抜けて入試が終わつたような気分になったり、逆に不安から勉強が手に付かなかつたりする者も出てくる。いち早く気持ちを切り換えるよう生徒を指導したい。

センター試験が終わると、生徒の間

## センター試験翌日から合格可能性判定までの指導

step

に結論を出せるものではない。まして第1併願パターン、第2併願パターンとも難しくて新たな大学を提示された場合、今までの志望を覆すわけだから生徒は慎重にならざるを得ない。遠距離の大学を提示された場合はなおさらである。担任は二者択一くらいのところまで持つていつて「後は家族とよく相談するよ」と、生徒に考える時間を与えたい。たとえその場で決めても、家庭で経済的問題などが持ち上がることもあるので、最終的な結論は家族を交えて出すようにさせる。

に「今年の試験は難しかった」とか「平均点が上がりそつた」などと、いろいろな情報や噂が流れる。しかし、あくまで推測にすぎず、集計結果が出るまではつきりしたことは分からない。そうした情報に惑わされないよう伝え、個別試験に向けて生徒が早めにスタートを切れる雰囲気を作っておきたい。

学習面では、個別試験対策はセンター試験対策同様、過去問題集が中心になる。出願予定校の入試問題を過去5年間分以上は解いて、完璧に理解できるようにする。余裕がある場合、10年分まで遡ると、その大学の出題傾向がより見え、理解も深まる。

センター試験が終わつてから個別試験まではある程度まとまつた日数があり、しかも個別試験の出題傾向は比較的はつきりしているの、絞り込んで対策を立てる。時間はあるので焦つたりしないよう生徒には言っておきたい。

志望校を勝手に変えさせない  
センター後は気持ちの切り換えを  
個別試験対策は過去問題集が中心

## 受験校決定のための最終面談

step

合格可能性判定が出たら、受験校決定のための最終面談となる。面談スケジュールを決める方法の一つとして、黒板に面談日を時間ごとに区切つておき、各生徒に面談希望時間を自分で書き込ませて、生徒同士で時間調整をさせる。そうすれば都合のよい生徒から面談でき、忙しいこの時期の時間を有効に使うことができる。

面談は、センター試験の出来が良く判定結果も良い生徒の場合として問題は無い。それでも、担任が「よし、その大学で頑張れ」と励ますのと、何も言わないのでは、生徒の意気込みに差が出る。短い時間でもよいので面談をするようにしたい。

問題は、センター試験の結果が思わしくなく、弱気になる生徒の場合だ。最近の生徒は安全志向が強く、とまずと慎重になりがちだが、あまり弱気になって下ばかり見ていると切りがなくなる。易きに流れ始めると、学習面でも応用力や思考力を要する、腰を据えて取り組む問題をやる余裕がなくなり、基本や暗記物ばかりに目が向くよ

うになる。特に現役生はこの時期でもまだ十分に学力が伸びる余地があるので、安易に目標を変えさせず、前向きな気持ちにさせることが大切だ。後になって「出願すればよかった」と後悔させないためにも、この点は注意したい。視線が上を向けば、気持ちの面でも、頑張る気になってくるものだ。

また、志望校を変えるべきかどうか、限られた時間の中で決断を迫られている生徒の場合、担任にとつても判断が難しいケースがある。C判定でも個別試験の力との関係や、センター試験の配点比率との関係で困難が予想される場合もあれば、逆にD判定でも個別試験の力があるため、合格する可能性が高い場合もある。過去の模試結果、昨年度のその大学の合否状況、教科担当の意見など、総合的に見て判断するようにつにしたい。なお、中間集計として発表される各大学の志願倍率などは、あくまで途中経過であり、あまり判断の目安にしない方がよいだろう。

判断が微妙な生徒の場合、どの大学に出願するか、生徒は面談の場ですく

に結論を出せるものではない。まして第1併願パターン、第2併願パターンとも難しくて新たな大学を提示された場合、今までの志望を覆すわけだから生徒は慎重にならざるを得ない。遠距離の大学を提示された場合はなおさらである。担任は二者択一くらいのところまで持つていつて「後は家族とよく相談するよ」と、生徒に考える時間を与えたい。たとえその場で決めても、家庭で経済的問題などが持ち上がることもあるので、最終的な結論は家族を交えて出すようにさせる。

面談の前に、学年団が集まつて個々の生徒について検討会を開く方法もある。担任1人では判断が難しいケースでも、複数の教師の目を通すことで、より適切な判断が下せるようになる。例えば、担任が文系教科を教えている場合、理系の生徒についての判断が難しいことがある。学年団が揃つていれば、数学や理科の教師から「この生徒は、個別試験で配点の高い数学の力があるから大丈夫」などと、普段の授業や成績から感じた手心えを基に助言がもらえる。また、担任が気が付かない、その生徒に適した受験校を、他の教師から提示できることもあるだろう。

面談のときにも、「先生が、きみは応用力が強いと言つていたよ」「

先生がこつこつアドバイスをしてくれたんだ」「もう少し話を聞きたければ、××先生の所に行つて」「ら」と、複数の目ならではの話ができる。

ただし、検討会を開くには音頭を取る教師がいて、その教師や他の教師が各生徒の資料をあらかじめ作つておく必要がある。それだけでなく忙しい時期なので簡単なことではないが、実施しただけの効果は期待できるだろう。

1/15(土)・16(日)	大学入試センター試験(本試験)
1/16(日)・17(月)	正解等の発表
1/17(月)	自己採点と志望校提出(各校へ)
1/19(水) 予定	平均点等の中間発表
1/20(木) 予定	データネット説明会、合格可能性判定の発表(各校より)
1/21(金) 予定	得点調整実施の有無の発表(得点調整を実施する場合、1月22日土に対象となる科目の得点換算表が新聞発表される)
1/22(土)・23(日)	大学入試センター試験(追試験)
1/24(月)~2/2(水)	国公立大出願受付
2/3(木) 予定	平均点等の最終発表

面談スケジュールを効率的に組み、弱気な生徒を前向きにさせる

判定以外の生徒の状況を分析する

生徒には二者択一くらいを提示

家族を交えて結論を出させる

面談の前に学年団で検討会を開く

## 最終面談に用意したい資料

step

最終面談の際に何の資料を用意するかは、生徒に適切なアドバイスをするためにも、また生徒が納得できる判断材料を示すためにも重要である。

是非用意したいのは合否判定の度数分布表。それを見れば、実際には合否ゾーンは幅広く、合格可能性判定がDやEでも合格の可能性があり、反対にAやB判定でも不合格となることがあると納得でき、その後の個別試験対策の重要性が理解できる。

「COMPASS」のような志望校検索システムも便利だろう。志望校を決める判断材料として役立ち、画面にシミュレーション結果を表示しながら担任と生徒が話を進めていくことができる。

2段階選抜を予告する大学については、データネットなどで示される予想目標得点を判断材料として用意したい。このデータは、数社のものを準備し、その上で、最終的な判断は生徒に任せるとはならない。特に、生徒の点数が2段

階選抜ラインぎりぎり予想されるときは、本人が判断するしかない。後は本人のその大学への思い入れ次第である。生徒がそれでもその大学を受けた

と言つなら、「門前払い覚悟で出願してもよいのでは」というアドバイスにならざるを得ない。ただし、担任側から与えられる判断材料はすべて与えるようにしたい。

用意する資料としては、他に前年度の合格状況、生徒の過去の模試結果などがある。

### COMPASS(志望校検索システム)

COMPASSでは、個々の生徒ごとに志望校の合格可能性がコンピュータ画面でシミュレーションできるので、志望校を決める判断材料として役立つ。学部や地域から条件に合う大学を検索することもできる。



### 度数分布表で合否幅の広さを提示

### 志望校検索システムを活用

### 2段階選抜ラインの判断は生徒に

## 志望校変更が必要な生徒への指導

step

センター試験の結果次第では志望校変更を余儀なくされるケースも出てくる。元々志望校の予想目標得点と差があつて、センター試験で得点を稼ぐつもりがうまくいかなかったケース、個別試験の力がなくて挽回が望めないケース、センター試験の配点比率が高いのに失敗したケースなどである。

志望校の変更を勧める場合、生徒を不安な気持ちにさせないように言葉遣いに気を配る必要があるだろう。「きみの力では、大の方がいい」といったストレートな言い方をすると、「あれ？第一志望の大はダメなのか」と生徒の自信を失わせかねない。

志望校を変えた方がよいという教師の判断を、生徒に不安を起させないように、しかも、最終的には生徒が納得して前向きに新たな志望校に取り組めるように伝えるのはなかなか難しい。「一つの意見として聞いてほしい。」

大もよいかも知れないが、大もきみのやりたいことが実現できる大学だと思つ。もちろん、最終的にはきみが決断すべきことだよ」といった表現を

使うなどの配慮が求められる。

国私併願の生徒の場合は、私立大は日程さえ合えば何校でも受験できるので、私立大受験で本人の力より上位の大学を志望させるやり方もある。そして「私立大はここくらい挑戦してもいいんじゃないかな。じゃあ、国立大はここにしてみてはどうだろう」と、国立大については合格可能性の高い新たな大学を提示する方法もある。

生徒によっては浪人という選択肢もあり得る。ひた向きに努力したが時間が足りなくて全分野を学習できなかった生徒は、あと1年頑張れば伸びる可能性がある。浪人して伸びそうな生徒には、現役合格の可能性の高い大学を提示した上で、本人の意向を確かめる。「その大学に行きたい」と言えば現役合格を目指し、「浪人してでも第一志望校を目指したい」と言つならその方向に向かわせればよいだろう。

### 志望校変更は生徒の心を傷付けずに

### 私立大は上位の大学を目指す方法も生徒によっては浪人という選択肢も

## 私立大受験から最後まで

step

2月上旬から私立大の合格発表が始まるが、発表があつてもその結果を担任に連絡してこない生徒は意外と少なくない。登校日にも学校に来ず、なしの礫<sup>しづめ</sup>、ということもある。そういう生徒に教師の方から電話してみると、「全部落ちました」というケースもある。その場合、とにかく1回学校に来させて、その後の対策を考えるようにする。意思表示がきちんとできない生徒には入試結果については必ず担任に報告するよう事前に注意を促しておきたい。

複数の私立大に続けて落ちた生徒の場合、担任としては2期試験の腹づもりもおかなくてはならない。ただし、受験校が残っている段階では、生徒のやる気をそがないためにも、そのことは生徒にはまだ言わない方がよいだろう。

登校日のときに、合否結果の他、生徒の心の状態などについてもチェックしたい。不合格だった生徒には、精神面のケアと今後の対策を講じる必要がある。特に合格間違いなし、と思つていた大学に失敗すると、精神的にかなり落ち込んでいる場合がある。そういう生徒は、思考がそこで止まってしまつて、その先のことが考えられなく

なつていて、「元々力があるんだから、焦らなくても大丈夫」などと失敗の落ち込みから立ち直らせ、次の受験に奮い立たせるようにしたい。

後期日程試験は、学部・学科によって募集人員が極端に少なかったり、試験科目に小論文や総合問題など、生徒にとつて比較的馴染みの薄いものが課せられることがある。そのため、前期日程試験よりかえつて難しいのでは、と敬遠する生徒も少なくない。しかし、少々極端な言い方だが、後期日程試験は前期日程試験をクリアできなかった受験生が集まる試験であり、前期日程に比べて高いレベルの争いになるとは考えにくく、合格の可能性はある。生徒には、多少はつきりした言い方でそのことを話して理解させ、最後のチャンスに全力を傾けるよう指導したい。

もし生徒が望むなら、小論文指導など後期日程試験のための学習指導をするのもよいだろう。後期日程試験は大学ごとに出題傾向がつかみやすいので、この時期の学習指導は個別指導が中心となる。

なお、00年度入試では12大学12学部で、中期日程試験が予定されている。生徒の志望と大学の学問内容が合つようなら、チャンスを増やす意味でも挑戦させてみるとよいだろう。

一通り受験が終わると、外出して長期間家をあけてしまつ生徒がいる。しかしこの時期は、補欠合格についての

問い合わせが、大学から自宅に突然あつたりするので要は注意だ。例えば朝「補欠合格となつたが、入学の意思があるか、午前中に返事をするように」と電話がかかってくることもある。ところが、本人は外出していて連絡がつかず、返事ができないと、入学の意思がないと見なされて、せっかくのチャンスを逃してしまつことがある。特に国立大の後期日程試験の後でこつしたケースが起り得る。したがつて、まだ合格が決まつていない生徒は、この時期は旅行などで長期間家を離れないことが原則である。やむなく出掛けるときは、必ず家の人に連絡先を伝えておくよう、生徒に言つておきたい。

なお、私立大の入学手続きについては、必要以上に急いで手続きを済ませないように、生徒及び保護者に伝えておく。他の大学に追加合格した場合、入学金などが無駄になることも考えられるからだ。

### 合否結果を担任に必ず報告させる

### 2期試験などの情報を伝える

### 受験に失敗した生徒の精神的ケアを

### 私立大合格で気が抜ける生徒に注意

### 後期試験を敬遠する生徒を励ます

### 合格発表後の補欠合格に気を付ける